

小夜の中心 周辺マップ

豊かな自然とふれあいながら
歴史を散策して歩くと
不思議な伝説と巡り会います

※図中の距離表示は
久延寺を基点としております

至 金谷宿
(ふじのくに茶の都
ミュージアム方面)

至 菊川の里



夜泣石

有名な夜泣石物語に因む石(山賊に殺された妊婦の霊魂が移り、泣いたと云う石)。県道(旧国道1号)小泉屋脇にある。往古は旧東海道の沓掛からの上り坂の途中にあった。明治十四年(1881)東京の勲業博覧会に出展し、帰途現在の位置に移された。石面の「南無阿弥陀」の文字は弘法大師が指て書いたものと伝えられている。



久延寺

奈良時代の行基が開基と伝えられている名刹。徳川家康が慶長六年(1600)、掛川城主山内一豊に命じて観音堂を建立し、その後も毎年代参させたという由緒ある寺。また、夜泣石の伝説にまつわる子育て観音としても有名。境内に五葉松・小石姫供養塔(久延寺夜泣石)・茶亭跡・仲吉の顕彰碑・月小夜姫の墓・三位良政卿の墓などがある。山門は弘化四年(1847)に再建されたもの。



久延寺夜泣石(小石姫供養塔)

久延寺境内にある石。夜泣石と同じ形で「南無阿弥陀」と書かれている。この石は夜泣石物語の小石姫(石言遺響によると妊婦)を弔うために建てられた供養塔で、はじめ、門前の路傍にあったが昭和四十年頃境内に移された。



中心公園

小夜の中山公園は四季折々に桜、新緑、紅葉が美しい。また、公園内の小山を経塚と云う。かつて久延寺が戦火で消失したとき、多数の経巻が灰になりここに埋められたと伝えられている。公園内に宝篋印塔・一石五輪塔・地藏尊などがある。



扇屋(土・日・祝日のみ開館)
(電話: 0537-27-1474)



●中部電力
駿遠変電所

にっさかしく
日坂宿

日坂宿で江戸時代の面影を遺す数少ない建物の一つ。精巧な木組みと細かな格子が特徴的で身分の高い武士などが宿泊していた。また、ここには掛川藩主太田侯の二百余年前の茶室が復元されている。
川坂屋(土・日・祝日のみ開館)



この絵碁の周辺が安藤広重が描いた「東海道五十三次日坂」の場所。道の中央がかつて夜泣石物語の石のあった所。石は明治元年、明治天皇御東上のとき街道脇に移され、現在は県道(旧国道1号)脇にある。
た重の絵碁と夜泣石跡



この一里塚は江戸より五十四里。「東海道宿村大観帳」によると、当時は街道の両側にあり「松」と「榎」が植えられており道幅は三間あったと云う。
佐夜鹿一里塚



涼み松
かつて夜泣石のあった路の傍らに大きな松があり、松尾芭蕉がこの地で休み「命なりわずかの笠の下涼みなる句を詠んだ。これに因みこの松と周辺の地名を「涼み松」と云うようになった。

夢灯(浮世絵美術館)
広重、北斎、その他江戸時代後期の浮世絵師の東海道の宿駅の作品が展示されている。
(土・日・祝日のみ開館)
(電話: 0537-27-2237)

西行歌碑
焼失した東大寺再現のために、みちのくへ砂金勘進の旅をし、二度目の峠越えをしたおり、若き日にこの地を越えた事を思い出して詠った「年たけて…」の歌碑が中山公園入口に設立されている。西行法師六十九歳。

火剣山

東海道 小夜の中山峠 周辺案内



**旧東海道
小夜の中山
歌碑・句碑の道**

東海道の難所として知られた中山峠は、また和歌・俳句の名所でもありました

「小夜の中山」を詠み込んだ和歌は、勅撰集だけでも四十余首。このほか多くの歌集、句集、紀行文にとりあげられ、歌枕として古くから人々に親しまれ、愛されてきました。

代表的な和歌や俳句の碑が、この峠の道沿いに建てられています。遠い昔に想いを馳せながら、ゆっくり歩いてみてはいかがですか。



※図中の距離表示は久延寺を基点としております

- 1 雲かかるさやの中山越えぬとは都に告げよ有明の月 (阿佛尼)
- 2 旅ごろも夕霜さむきささの葉のさやの中山あらし吹くなり (衣笠内大臣)
- 3 西行の命の山ぞふきのたう (鴻村・現代)
- 4 旅寝するさやの中山さよなかに鹿も鳴くなり妻や恋しき (橘為仲朝臣)
- 5 風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな (西行法師)
- 6 年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山 (西行法師)
- 7 甲斐が嶺ははや雪しろし神無月しぐれてこゆるさやの中山 (蓮生法師)
- 8 東路のさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ (紀友則)
- 9 ふるさとに聞きしあらしの声もに忘れね人をさやの中山 (藤原家隆朝臣)
- 10 二道のべの木槿は馬にくはれけり (松尾芭蕉・野ざらし紀行)
- 10 東路のさやの中山さやかに見えぬ雲井に世をや尽くさん (壬生忠岑)
- 11 命なりわづかの笠の下涼み (松尾芭蕉・江戸広小路)
- 11 馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり (松尾芭蕉・野ざらし紀行)
- 11 甲斐が嶺をさやにも見しがけられなく横ほり臥せるさやの中山 (読人不知)

史跡と伝説の道

小夜の中山峠は、箱根峠・鈴鹿峠とともにその険しさをもって東海道の三大難所と云われていました。特に、東の青木坂(箭置坂)西の沓掛(二の曲り)の急勾配は旅人を悩ませました。



古来、「小夜の中山」は、「佐夜の中山」とも書き、「さや」「さよ」の二通りのいい方がありますが現在は「小夜」「さよ」が一般的です。名称の由来は諸説があり定かではありませんが、掛川誌稿には「日坂ヨリ菊川ニ至ルマテノ駅路ヲ小夜中山ト云其道両山ニ夾マレテ、左右ノ谷間甚狭シ、佐夜ハ峡谷ナルヘシ、其中間ノ山ナレハ、



峡谷ノ中山ト名ツケタルヘシ、古ヨリ佐夜小夜ナト書ルハ皆假名ナリ……」と記されています。

また、最近、「小夜はささぎの意味の「塞」であり、「中山」は境を示す言葉であるところから、「小夜の中山」は住人にとっては悪いものをささぎの「塞の神を祭る峠であり、旅人にとっては旅の安全を祈る「手向けの神」のいる峠を意味するという説もあります。「小夜の中山」の名は古くから数多くの紀行文や和歌に登場します。西行法師が六十九

歳で峠越えしたとき詠じた「年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山」がよく知られています。

峠には名刹久延寺をはじめ、徳川家康ゆかりの史跡や、遠く「中先代の乱」の頃の塚、往時の東海道の面影を今に伝える一里塚などがあります。江戸時代、久延寺周辺には多くの茶店がありました。それぞれの店では「餅の餅」を売ることが幕府より認められ、街道の名物となりました。また、小夜の中山には伝説も多く、「夜泣石物語」は「蛇身鳥物語」や「無間の鐘物語」とともに有名です。これらは江戸の僧 欣譽による「小夜の中山霊鐘記」(二七八)や滝澤馬琴の「石言遺響」(二八〇五)などにより広く世に紹介されました。

峠路よりの眺めは素晴らしく、お茶の緑が映える五月を始め、四季折々に楽しめます。峠の西麓日坂宿では、修復・復元された旅館屋など江戸時代の面影を遺す建物があり、往時の文化が偲ばれます。(片岡計夫)

※表紙絵：広重 東海道五拾三次之内(保永堂版) 日坂 浜松市美術館蔵
※上部絵：広重 東海道五拾三次(寛政入道版) 日坂 個人蔵
※下部絵：広重 五十三次(人物東海道) 日坂 浜松市美術館蔵

お問い合わせはお気軽に
掛川市産業観光課
〒436-8650 静岡県掛川市長谷1-1-1
TEL.0537-21-1125